

西鶴「五人女」の人妻にみる好色の位相

安 藤 幸 輔

一

「好色五人女」の中の「人妻」は、「情を入し樽屋物かたり」(巻二)の「おせん」と、「中段に見る曆屋物語」(巻三)の「おさん」の二人である。ともに「夫」以外の男との好色によつて悲劇的な最後を遂げるのであるが、この二人の好色を順に考えてみよう。

「おせん」は「樽屋」の恋女房であり、夫婦仲の睦まじさは人も羨むほどであった。特に「おせん」の愛情のこまやかな世話女房ぶり、貞節ぶりは格別である。「相生よく、仕合よく、夫は正直のかうべをかたぶけ、細工をすれば、女はふしかね染の嶋を織ならひ、明くれかせぎける程に、盆前大晦日にも、内を出違ふほどにもあらず、大かた世をわたりけるが、殊更、男を大事に掛、雪の日、風の立時は食つきを包をき、夏は枕に扇をはなさず、留守には、宵から門口をかた

め、夢く外の人にはめをやらす、物を二ついへば、「こちのお人お人」とうれしがり、年月つもりてよき中に、ふたり迄うまれて、猶く、男の事を忘れざりき」(こけらは胸の焼付さら世帯)とある。

この「おせん」が綱屋長左衛門と道ならぬ関係になるのは、思いがけぬ出来事からである。この日は、長左衛門の亡父の五十年忌の法要のために、町内の人たちが多勢集まり、「おせん」も近所づきあいをしていた関係で台所仕事の手伝いでもとやってきていた。その「おせん」へ「兼て、才覚らしく見えければ、『そなたは、納戸にありし菓子品を縁高へ組付て』(木屑の杉やうじ一寸先の命)もらいたい、という依頼である。御所柿や唐胡桃や落雁などの高級な菓子を盛りつけるには、気のきいたセンスを必要とするという判断があり、「おせん」が相応しいと思われたのである。そこへ当主の長左衛門が入ってきたが、むろん、他意があつたことではな

く、皿小鉢を取るためにやってきたのである。そして、「亭主の長左衛門、棚より入子鉢をおろすとて、おせんがかしらに取おとし、うるはしき髪の手目たちまちとけて」(同上)しまうという椿事が起きる。法事の手伝いのためにと、髪結いに頼んできれいに結ったばかりの髪である。「あるじ是をかなしめば」という簡単な記述の中に、長左衛門がどんなにあわてたか、そして様々に言葉をつくして詫びたかが想像できる。だが、△おせん▽は「『すこしもぐるしからぬ御事』と申て、かい角ぐりて、台所へ出」(同上)てゆくののである。

ここに△おせん▽という女の面目が躍如としている。ぐるぐると無雑作に髪を巻きつけて、簪でとめたまま平気で台所にでてゆくというところから感じとれるのは、物にこだわらない性格であり、自分に自信をもって行動しているさわやかさである。△おせん▽は、自分が勝手口の手伝い女という端役に過ぎないことを自覚する聡明さをもっているし、また、無雑作なぐるぐる巻でも醜くみえない自分を知っているのである。じじつ、読者の前に初めて姿を現わす△おせん▽は、十四歳の腰元としてであるが、「片里の者にはすぐれて、耳の根白く、足も、つちけはなれて」「自然と才覚に生れつき、御隠居への心づかひ、奥さまの気をとる事、それよりすへくの人迄あしからず思はれ、其後は内蔵の出し入をもまかされ、此家におせんといふ女なふてはと、諸人に思ひつかれ」(恋に泣輪の井戸替)るようになったという、いわば薄皮

のむけた、挙措動作も魅力的な、聡明な女として登場しているのである。これが結婚して、いっそう女らしさを身につけてきていると思えるし、ぐるぐる巻の髪は、一種しどけなきといった魅力をもっていたと考えられなくもない。これは、あながち私の勝手な空想とばかりはいえない。△糊屋▽の内儀も、同じ思いをもっていたようにも思われるからである。

「かうじやの内儀見とがめて気をまはし、『そなたの髪は今このさきまでうつくしく有しが、納戸にて俄にとけしはいかなる事ぞ』といはれし。おせん身に覚なく、物しづかに、『旦那殿棚より道具を取おとし給ひ、かくはなりける』と、ありやうに申せど、是を更に合点せず、『さては昼も棚から入子鉢をつる事も有よ。いたづらなる七つ鉢め、枕せずにはしく寐れば髪はほどくる物じや。よい年をして親の吊ひの中にする事こそあれ』と、人の気つくして盛形さしみをなげこぼし、酔にあて粉にあて、一日此事いひやまず」(木屑の杉やうじ一寸先の命)というのは、たしかに異常ともいえる悟気であるが、そうさせずにおかないものを△おせん▽がもっていたと考える方が自然である、内儀は、二人の間に何かがあった、などと真実思っているわけではない。△おせん▽へのいやがらせをいつているに過ぎない。「兼て、才覚らしく見えければ」というのは、隣近所の人たちの一般的な見方であり、△おせん▽が際立った存在であったことを意味している。内儀にとっても気にかかる存在であった。いいチャンス

とばかり普段のうっぶんを晴らそうというわけである。二人の間に何もなかったと思つていればこそ、内儀は一日中あてこすりをいっていられるのである。もし二人の間に何かが事実としてあったとしたら、どういふことになるのか。それが集まっていた人に知られたことは、「後は人も聞耳立て」とあることからわかるから、この作品の結末部分にもあるように、「死罪」といふことになるだろう。何もなかった、と内儀も思い、人も思っているからこそ、口にもだし、聞いてもいられるのである。本当に疑つてかかるならば、内儀は自分の△亭主▽を先ず責めるといふのでなければなるまい。「おせんめいわくなから聞暮せしが、『おもへばくにくき心中、とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非におよばず、あの長左衛門殿になさけをかけ、あんな女に鼻あかせん。』と思ひそめしより、各別のこゝろさし、ほどなく恋となり、しのびのびに申かはし、いつぞのしゆびをまちける」(同上)といふことになり、悲劇が芽生えるのである。

△おせん▽が恋をしかけるのは、「あんな女に鼻あかせん」
と思つたことと、「とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非におよばず」と思つたことからである。「あんな女に鼻あかせん」といふのは、長左衛門に恋をしかける理由としては興味ぶかいことである。これは、腹立ちまぎれの一時的興奮ならともかく、「各別のこゝろさし、ほどなく恋となり」といふように、決してその場限りの情熱ではないとすればなおさ

らである。「各別のこゝろさし」といふのであるから、△おせん▽が積極的に働きかけたことであり、さまざま手段や方法を用いたことでもあろう。△おせん▽がこのように継続的に情熱を傾ける根拠は、内儀の「にくき心中」である。情ぶかさへの腹立ちである。「あんな女」といふいいかたに、そのときの△おせん▽の気持がこめられている。しかし、内儀に△おせん▽がそれほどに拘泥しなければならぬとは思えない。「後は人も聞耳立て興覚ぬ」とあるから、近所の人にも内儀の度外れないやがらせに呆れ、快く思わなかつたといふことであらうし、△おせん▽は同情される立場にあつたことであらう。△おせん▽は近所の人たちとともに、この情ぶかい内儀の取乱し様を、困惑しながらも蔑み憐む立場に身を置くこともできたのである。にも拘らず、「にくき心中」と思わずにいられないのは、内儀の態度がおせんには我慢ならなかつたからである。態度というのは、町内の人たちは自分の味方である、という思いあがりである。社会的モラルといったものを前面に押し出して、自分の内部の醜い嫉妬やいやがらせを隠したやりかたであり、大儀名分をふりかざして、一方的に断罪しようとする態度である。だが△おせん▽は、「めいわくなから、聞暮」している以外に、対応の方法がない。濡れ衣を着せられても、晴らす方法がないのである。こうした立場に追いやられた△おせん▽の憤りは、しかし内儀だけに向けられたものではない。理不尽ないがかりにも黙

って堪えるしかない、自分自身への憤りでもある。これはまた、内儀が背負って後楯としてゐるモラルへの苛立ちであり、その前に萎縮してしまっている自分への腹立たしさでもあろう。そうした出口のない△おせん▽の気持は、「あんな女に鼻あかせん」と決意することで、ようやく救われることになる、というふうに見えるのである。

「とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非におよばず」という△おせん▽の心理も、極めて興味ぶかいものがある。「ぬれたる袂」というのは、この場合は、内儀のいいがかりであり、近所の人たちの前で恥をかかせられたことである。だが、すでに考えたように、△おせん▽の立場は近所の人たちから理解され同情されている。「ぬれたる袂なれば」と深刻に考える事態ではない。「此うへは是非におよばず」と決意することもない。ここでの△おせん▽の心理は、余りに不自然であり、長左衛門へ恋をしかける動機として唐突であり過ぎる。加えてすでに見たように、亭主との仲も円満であり、二人の子供のいる家庭は、平和で健全である。これを捨てて、どうして△死▽と隣合わせの恋をしかける必要がある。しかも、長左衛門から誘われたわけでもないのだから。となれば、△おせん▽の内面に理由を求めなければならぬ。

一見して唐突で不自然な変容は、△おせん▽の場合ここにはじまったことではない。腰元であつたときに男ぎらいで通

っていた△おせん▽が、△こさん▽という唄の仲介で、△樽屋▽と結ばれるまでの経緯をみたとき、私たちは同じような驚きをもつのである。腰元の△おせん▽が内蔵の出し入れをまかされ、誰からも信頼されていたことは、すでに紹介した通りであり、「其身かしこきゆへぞかし」と作者は感想をのべている。「され共情の道をわきまへず、一生枕ひとつにて、あたら夜を明しぬ。かりそめにたはぶれ、袖つま引にも、遠慮なく声高にして、其男無首尾をかなしみ、後は此女に物いふ人もなかりき」(恋に泣輪の井戸替)という状態であった。

それなのに、△こさん▽の口上手にのせられたこともあるが、「おせんも自然となびき心になりて、もだくと上気して、『いつにても、其御方にあはせ給へ』(踊はくづれ桶夜更て化物)というのは尋常でない。伊勢のぬけ参りの途中で男に会わせるようにしようといわれると、「おせんもあはぬさきより其男をこがれ、『物も書きやりますか、あたまは後さがりで御座るか、職人ならば腰はかゞみませぬか、爰出た日は守口か枚方に昼からとまりまして、ふとんかりて、はやう寐ましょ』(同上)というに至っては、男ぎらいで通っていた△おせん▽と到底同一人物とは思えない。そして、ぬけ参りの道中で△樽屋▽と落合える見通しがつくと、仲介者の△こさん▽が伊勢まで同行しようというのを、「せんいやな貞して、『年よられて長の道思へばく及がたし。其人に我を引合せ、兎角伏見から夜舟でくだり給へ』と、はやまき

心になりて、気のせくまゝに、いそぎ行」(京の水もらさぬ中忍びてあひ釘)という△おせん▽になってしまふのである。

恋の仲介で干に一つの失敗もしないというのが自慢の鼻は、△おせん▽に焦れている△樽屋▽の頼みで、策略をもって成就させたのである。初め鼻は、△おせん▽の奉公先に顔色をかえてとびこみ、二十四、五の美男が亡霊のようにとりついて、腰元の△おせん▽との恋がみのらないなら、この家の人間を一人残らずとり殺す、といい、自分も体の力がぬけて病気になったようだと、この家のものに扶けられて帰宅したなり臥せてしまふ。「いづれもおとろく中に、隠居泪を流し給ひ、『恋忍事世になきならひにはあらず。せんも縁付ごろなれば、其男身すぎをわきまへ、博奕後家くるひもせず、たまかならばとらすべきに、いかなる者もしれず、其男ふびんや』(同上)といわせるような効果をあげ、△おせん▽を見舞に呼び寄せることにも成功する。見舞にやってきた△おせん▽に、「我ははやそなたゆへにおもひよらざる命をすつるなり、自娘とても持されば、なき跡にて吊ひても給はれ」(同上)と、珠数袋と革足袋の二つを形見として渡すのである。△おせん▽は「女心のはかなく、是を誠に泣出し、『我に心有人、さもあらば、何にとて其道しるゝこなた様をたのみたまはぬぞ、おもはくしらせ給はゞ、それをいたづらになさじ』(同上)ということになる。

しかし、この鼻の策略にのったようにみえる隠居は、△お

せん▽が「縁付ごろ」であるから、この機会を利用しようと考えたようであるらしいし、形見をもらって涙ぐむ△おせん▽も、うまく芝居をしているように思われる。△樽屋▽から△おせん▽は何度も懸想文をもらっているが、それには返事をだしていなかったことは、「内かたのお腰もおせんがく〱百度の文のかへしもなき」(恋に泣輪の井戸替)と、△樽屋▽が鼻に告白しているのでもわかる。△樽屋▽の存在をこれまで無視してきたのは、冗談に袖づまを引かれても声高にたしなめる、という態度に照応する。

だが、これまでの経緯から導きだされてくるのは、「情の道をわきまへず、一生枕ひとつにて、あたら夜を明し」てゆく、男ぎらいの△おせん▽ではない。むしろ、好色というにふさわしい女である。表面は無関心を粧いながらも、内心では男の言動に気を配っている娘である。自分の周囲にいる腰元や仲居や下女と、番頭や下男との間にやりとりされる軽口や、噂話や、悪戯めいたことに、異常な関心をもっていたにちがいない。そして、いうところの△耳年増▽であったはずである。そうでなければ、鼻の話だけで、「もだ〱と上気して、いつにても其御方にあはせ給へ」とか「あはぬさきより其男をこがれ」とかとなるわけではない。「爰出た日は、守口か枚方に昼からとまりまして、ふとんをかりてはやう寐ましょ」に至っては男ぎらいの処女からは、とうてい考えられない言葉である。そして、仲介者の鼻を追い返して二人だけ

になりたいたと考えたり、△樽屋▽との最初の首尾の手際よさなどをみたりすると、単に△耳年増▽にとどまらぬ、天性の好色を思わせるのである。

唄の仲介にのせられて、男ぎらいの△おせん▽が、好色な女に突如として変身したのではない。世間の眼を恐れて、内部に閉じこめられ抑圧されていた好色が、唄の仲介がきっかけとなって解放されただけなのである。△おせん▽の豹変は、彼女にとって少しも不自然でないばかりか、女としての内的欲求がさせた必然であったということが出来る。ただ彼女には、世間的に承認されている唄の仲介という、一つのきっかけが必要だったのであり、自分を納得させるに足る理由が必要だけだったのである。

これは、糺屋長左衛門との関係に、そのまま当てはまるようにも思われる。「あんな女に鼻あかせん」と考え、「とてもぬれたる袂なれば、是非におよばず」と決意したのは、自分の内部の欲求を正当化するための弁明に過ぎない。この欲求は一口にいうのは難しいが、人妻というものが抱くにちがいない、漠然としたある種の願望といったものである。それは誰に對して、何に對してという、明確なものではないが、常に彼女の深いところに蠢いている形のない情熱といっているものである。はっきりした言葉でいってしまえば、やや外れたことになるかも知れないが、彼女を束縛しているものから脱出したい願ひであり、自分を支配しているものから精神的に

も肉体的にも解放されたいという思いである。この時代がよき封建的な時代であり、家が男性社会の集約的な位置を占めていて、女房が人間らしく生きるに困難であった、ということばかりではない。文学作品に描かれた人妻の織りなす、姦通、家出、夫殺しなどは、その現われかたは様々ではあっても、その深層には共通した願望や情熱があり、それが一つのきっかけを持って噴出した結果に過ぎないように思われるからである。(時代も異なるし、全く唐突で、不自然ではあるが、私は芥川龍之介の「藪の中」を思いうかべる。夫婦の愛憎のかたちが、複雑であり微妙であるものとして、謎も多く、今日でも論争が絶えないのだが、△真砂▽の深いところにある△人妻▽の、いわれなき願望の存在を認めれば、謎のいくつかは解けるように思われるのである。)

△おせん▽の場合は、糺屋の内儀のいいがかりがきっかけとなって、内部に眠っていた漠然とした情熱が、その噴出すべき方向を持つに至った、というふうに見えるのである。これが△おせん▽にとっての好色なのである。その相手は長左衛門でなくても構わないし、その首尾を果すかどうかも、じつはどうでもよいことなのである。自らの内部の情熱のままに生き、囚われている自分を解放させるための好色なのである。だから、ここに至るまでの△おせん▽と△樽屋▽とが結ばれるまでの経緯や、仲介人の唄や仇役の久七などの人物の描写に、作者は多くの筆を費したのであり、△おせん▽

んVと、その時代と社会と、そこに生きる人間を活々と造型してしまえば、肝腎の場面はただの一刷毛で十分ということになる。「樽屋もともし火消かかり、男は屋のくたびれに鼻をつまむもしらず、おせんがかへるにつけこみ、『ないく約束、今』』といわれていやがならず、内に引入、跡にもさきにも、是が恋のはじめ、下帯下紐ときもあへぬに、樽屋は目をあき、『あはゝのがさぬ』と声ををかくれば、よるの衣をぬぎ捨、丸裸にて心玉飛かごとく、はるかなる藤の棚にむらさきのゆかりの人有ければ、命からからにてにげのびける。おせん、かなはしとかくごのまへ、匏にして、こころもとをさし通し、はかなくなりぬ」(木屑の杉やうじ一寸先の命)がすべてである。そして、糺屋もとらえられて死罪となるのである。

△おせんVの心理は、「かなはしとかくごのまへ」としか描かれていない。ここには、これまでの△おせんVの一切が、集約され、重層化されているのである。内部の声の命じるままに、死とひきかえてでも好色に生きようとした、一人の女の息づきが生々しく伝わってくる。この好色が、社会的モラルへの反逆であり、人間的復権を求める無意識の欲求である、などというのは私の勝手な解釈に過ぎぬ。モラルも秩序もてんで齒のたたない、元祿女の典型をみるだけでいいのかも知れないのである。

二

「中段にみる曆屋物語」の△おさんVも、死とひきかえの好色に生きた人妻である。富裕で社会的にも大きな存在である△大経師Vの内儀として、人にも羨まれ、夫からもあり余る愛を得ている。「花の夕月の曙、此男外を詠もやらずして、夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねけるに、明暮世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に気をつくし、すへくゝの女に手紬を織せて、わが男の見よげに始末を本とし、竈も大きくべさせず、小遣帳を筆まめにあらため。町人の家に有たきは、かやうの女ぞかし」(してやられた枕の夢)といわれる△おさんVは、京中の美女も顔色なしといわれるほどの美形でもある。それが、夫の大経師が江戸へ商用で出掛けた留守に、手代の茂右衛門と道ならぬ関係になってしまうのである。

きっかけは、腰元の△りんVが、手代の茂右衛門に懸想したことからである。茂右衛門は、△おさんVの実家から差遣された手代であり、大経師の留守の間だけ表向きの用をするための、正直一途な男である。なりふり構わず、「只、十露盤を枕に、夢にも銀もふけのせんさくばかりに明し」(同上)ている無骨者に、思いを寄せた△りんVではあったが、文字を知らないために伝えることができない。男の筆をかりたいと下男にひそかに頼もうとすれば、自分が△りんVの相手に

なろうというようなこともあって、悩みは深くなるばかりである。△りん▽の思いを知った女主人の△おさん▽は、江戸にいる大経師への便りのついでに、『りんがちは文書とらせん』と、ざら／＼と筆をあゆませ、『茂のじ様まいる、身より』とばかり、引むすびて（同上）やるのである。△おさん▽は△りん▽の気持がいじらしいと思つたまでのことであるが、ここに悲劇が胚胎する。

茂右衛門からは、△おさん▽の筆とは知らずに返事がくるが、文字の読めない△りん▽は、暇のあるときをうかがつて△おさん▽に読んでもらう。「おほしめしよりておもひもよらぬ御つたへ、此方も若ひものの事なれば、いやでもあらず候へども、ちぎりかさなり候へば、取あげば、かむつかしく候、去ながら、着物羽織・風呂銭、みだしなみの事共を、其方から、賃を御かきなされ候はゞ、いやながらかなへてもやるべし」（同上）という人をくつた返事である。ここから感じられるのは、△りん▽を軽く見ての嘲弄の態度である。風呂代から産婆の謝礼まで負担しろというのである。

問題は、『去迎はにくさもにくし、世界に、男の日照はあるまじ。りんも大かたなる生付、茂右衛門程成男を、そもや持かねる事や有』と、かさねて又文にしてなげき、茂右衛門を引なびけてはまらせんと、かづかづ書くどきて、つかはされける」（同上）という△おさん▽の心理である。同じ女としての立場からの憤りであるにはちがいがいが、別の立場から

の感情移入が行なわれていることも否定できない。そして、今度は真剣になって、茂右衛門にあてて手紙を書くのであるが、これは茂右衛門の心をとらえてから、それを弄んでやるうという企みである。女の心を踏みつけにした憎い男に、仕返しをしてやろうというのである。この企みの面白きは、△おさん▽とすれば、狂言のつもりであり、狂言であると自分を納得させることによって、大胆に茂右衛門の気持をくすぐるような手紙を書くことができることである。これは△おさん▽の気持をそのまま書送るのであって、△りん▽の立場に立って△りん▽の気持を代弁するのではない。つまり△おさん▽は、△りん▽という名の後に隠れて、自分の恋心を告白するのであり、しかも、自分では△りん▽のための行為であると思ひこんでいるという、虚実の境に身を置いているのである。だが、これはすでに茂右衛門と不倫の関係にあることであろう。そうでなければ、夫以外の別の男への好奇心であり、ひそかな冒険をたのしみたいという無意識の願望といつていいだろう。茂右衛門は、△りん▽と思ひこみながら、△おさん▽の恋心に応じているが、△おさん▽の方は茂右衛門という男を思い描きながら応じているのである。

これが明瞭な形をとるのは、茂右衛門からの返事に、五月十四日の夜に逢いにゆくという約束があったときである。茂右衛門を笑いものにする策略として、△おさん▽は△りん▽の身替りとなって寢床で待ち受け、「おさん様の御声たてさ

せらるゝ時、皆々かけつくるけいやくにして、手毎に棒・乳切木・手燭の用意して、所々に「(同上)待つということにするのであるが、寢床で待ち受けるのは、どうしてへりんVであつてはいけないのか。茂右衛門がしので来たら、へりんVが大声をあげればいいのである。だが、へおさんVにとってへりんVは、すでに名目上の存在に過ぎず、茂右衛門との交渉はゲームであり、狂言であると自分に思いこませる役割でしかないのである。そして、へおさんVが自分でも気づかない深いところで、夫以外の男を求めていたことを知らされるのは、襲撃する手筈で待機した女たちは宵からの騒ぎで眠りこけ、へおさんVも寢床の中でまどろんでしまつて、茂右衛門に肌を許してしまつてからである。『茂右衛門下帯をときかけ、闇がりに忍び、夜着の下にこがれて、裸身をさし込、心のせくまゝに言葉かはしけるまでもなく、よき事をしすまして、袖の移香しほらしやと、又、寢道具を引きせ、さし足して立のき、』さてもごさかしき浮世や、まだ今やなど、りんが男心は有まじきと思ひしに、我さきにいかなる人か物せし事ぞ』とおそろしく、重てはいかないかなおもひとゞまるに極めし。其後、おさんはおのづから夢覚て、おとろかれしかば、枕はづれてしどけなく、帯はほどけて手元になく、鼻紙のわけもなき事に心はづかしく成て、『よもや此事人のしれざる事あらじ。此うへは身をすて、命かぎりに名を立、茂右衛門と死手の旅路の道づれ』となをやめがたく、心底申し

かせれば、茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひ」(同上)ということになる。

うかつにも肌を奪われてしまった動揺から立直り、茂右衛門に自分の覚悟を打明けるまでの、へおさんVの心理の推移に注目しなければならぬ。「此事人の知れざる事あらじ」というへおさんVの判断は、やや早計に思われぬものでもない。状況から考えて、事実を知っているのは、へおさんVと茂右衛門の二人だけである。いや、へおさんV一人である。茂右衛門がへおさんVと知っていたかどうかは疑わしい、としなければならぬ。じじつ、茂右衛門はへりんVと思つたことに驚いて、二度とへりんVとは関係しまいと自分いいきかせている。むろん、へおさんVの判断の材料には、この茂右衛門の考えは加わらない。しかし、これまでの経緯から、茂右衛門はへりんVと思つていた、と判断すべきである。茂右衛門が、へおさんVと考える客観的根拠は全くないといつていい。これまでの手紙の相手はへりんVと思つていたのである。へおさんVも知れないという疑念が少しもあれば、茂右衛門は忍んでゆくことはしなかつたろう。茂右衛門がへおさんVを相手とすべき何の理由もない。主家の娘であり、大経師の内儀である。へおさんVが、「心底申さかせれば、茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひ」と、の

っぴきならない事実の後でも、茂右衛門は△おせん▽と関わり合いたくないほどなのである。だから、忍んでくるまでは、△りん▽と悪いこんでいたと考えるのが自然である。では、△おさん▽は、肌を触れてから茂右衛門が気づいた、というふう思ったのであろうか。それはもともな心配である。しかし、だからといって茂右衛門が、そのことを誰かに話すとは限らない。話すことはないと考える方が自然である。命にかかわることなのである。となれば、「此事人のしれざる事あらじ」という判断はどこからくるのか。考えられるのは、この計画に参加している△りん▽をはじめとする私たちの誰かが知っている、という判断である。もしそうであるなら、女たちは茂右衛門が忍んできたのを知っていたいながら、△おさん▽が声をあげるまで見守っていたということではなければならぬ。だが、これまでの経緯からそれは考えられない。忍んでくるのに気がつけば、何らかの対応がなされるはずである。こう考えてくると、△おさん▽が「此事人のしれざる事あらじ」と判断する根拠が見当たらない。

不覚にも肌を許してしまった△おさん▽は、強い衝撃と動揺のために、とっさには冷静な判断ができなかったろうという想像はつく。それならば、どうしてとっさの防衛本能が働かなかったのか。ここでいえることは、△おさん▽さえその気になれば、茂右衛門とのことは誰にも知られずに済みますことができた、ということである。だが、△おさん▽は、この

過失を過失として葬らずに、自分自身の新しい世界をひらくためのきっかけとしたのである。自分の中に蠢動していた欲求は、△りん▽のために義憤を感じ、茂右衛門に手紙を書き、身替りとなって男を待ちうけても、まだ△おさん▽自身には自覚できないものであった。それは好奇心であり、冒険心であり、狂言の楽しみであり、ゲームのスリルという形をとっていたのである。そして、茂右衛門に肌を奪われたという事実が、欲求の正体を明らかにしてみせ、△おさん▽の内部分でたゆたっていた情熱に方向を与えるきっかけとなった、というふうな考えられるのである。

これは、△樽屋おせん▽が、△鞠屋内儀▽のいいがかりを、好色のきっかけとしたのと同じ図式である。△おせん▽と同じく△おさん▽も、自分の好色への志向を納得させるために、偶然の過失、あるいは不覚の過失を利用したのである。過失の内容の差異は、何ほどの意味もない。自分を好色へふんぎらせるものであれば、それは何であっても構わないのである。すでに前章で考えたような、人妻の好色の特徴的な位相がここにもみられるのであり、家の抑圧から脱れたいという思いや、夫の束縛から自由になりたいという願望が、△おさん▽を好色に走らせたように思われるのである。

だが、△おさん▽の好色は、△おせん▽よりも更に確かな可能性を投影していることに注意しなければならない。△おせん▽の好色は、肉体的であるよりはむしろ観念的、精神的

なものに傾きがあり、首尾をしたとき―その直前―が終焉であるのに反して、△おさん▽のそれは、感覺的、生活的であつて、肉体的な關係が、好色の出発点となつてゐる。前者は、意識として社会的モラルへの反抗に連なるものがあるが、後者は現実に生活することが、おのずからの批判となつてゐることである。また、前者は自らの心の姿勢を貫くために、ひたすら破局への道を走つたのに対し、後者は好色生活をつづけるためには、現実と妥協し自分の姿勢を変えることも平氣なのである。

特徴的なことは、△おさん▽が生きるための逞しい生命力と、現実的な才覚をもつてゐることである。一つの現われは、あわたたしい中にも、五百兩の金子を挿箱に入れてきたことである。(人をはめたる湖)また、追手を逃れるために、金で備つた水泳の上手な漁師にとびこませて水音を立て、それとわかる遺品を岩の上に置いて湖で入水自殺したようにみせかける才覚をみせるのもそうである。(同上)また、丹波越えの次の部分に、△おさん▽の面目をみる事ができよう。

「おもへば生ながら死だぶんになるこそ心ながらうたてけれ。なお行さき柴人の足形も見えず、踏まよふ身の哀も今、女のはかなくたどりかねて、此くるしさ息も限と見えて、白色替りてかなしく、岩もる雫を木の葉にそゞぎ、さまざま養生すれども、次第にたよりすくなく、脉もしづみて、今に極まりける。薬にすべき物とてもなく、命のおはるを待居る時、耳

ちかく寄て、『今すこし先へ行ばしるべある里ちかし。さもあらば此浮をわすれて、おもひのまゝに枕さだめて語らん物を』となげけば、此事おさん耳に通じ、『うれしや、命にかへての男じゃもの』と氣を取なをしける。(小判知らぬ休み茶屋)△おさん▽の口から出た一言に、彼女の生涯が集約され、好色のいのちといったものが示されてゐるのである。△おさん▽も最後には悲劇的最後を遂げるのであるが、それまでの日々を、その逞しい生命力と現実的な才覚で、その好色生活を楽しみつづける。自分の肉体を信じ、生活を大切に、現実にしっかりと足を踏んばつて、もう一つの△夫婦生活▽を営んだところに、△おさん▽の好色の意味がある。△おさん▽の最後は「かなはじとかくごのまへ、匏にしてころもとをさし通し、はかなくなりぬ」であり、△おさん▽の最後は、「曙のゆめさらく／＼取期いやしからず、世語とはなりぬ」であり、その残した思いはそれぞれであるが、ともに、自らの女のいのちにめざめ、自らの内部の声の命じるままに生きようとしたのであり、それを許さぬ時代と社会に反逆した末に力尽きたという点で変りはないように思われる。そしてここに西鶴作品の△好色▽の意味が改めて問ひ直されなければならぬように思われるのである。

(注) テキストは「日本古典文学大系」(岩波書店)とした。

(注) 本論中、先学の学恩の一事を記せなかつたことをお詫びしたい。